

気になる子への配慮を含めた指導計画

仲田 智恵子・篠原 恵子・横井 信子・伊藤 祐子

The Instruction Plan to Pay Attention to Children with Suspected Disabilities

Chieko NAKADA Keiko SHINOHARA Nobuko YOKOI Yuko ITO

キーワード：気になる子への配慮、統合保育、個別の関わり

1. はじめに

人間としての基本的人権は、障害をもつ人も、もたない人も平等である。誰もが社会の中で幸福や権利を等しく受けて、共に生きるノーマライゼーションの理念に立ち、保育所では、障害児保育を進めている。

そして保育所における障害児保育は、保育所保育指針の保育の目標である子どもが生涯にわたる人間形成の基礎を培う極めて重要な乳幼児期に、子どもにとっての「最善の利益」を守り、子どもが現在を最もよく生き、望ましい未来を作り出す力の基礎を培う場として、障害をもつ子と、もたない子が統合された集団の中でふれあい、生活を経験しながら、双方に社会生活に必要な基礎的能力を身につけ、子どもの人間性や心身の発達に好ましい影響を与えていけるよう、統合保育を行っている。

我が国においては、国連で採択された障害者権利条約を受けて、共生社会の形成に向けたインクルーシブ教育システムを推進し、人間の多様性の尊重等の強化、障害のある人が精神的及び身体的な能力等を可能な最大限度

まで発展させ、自由な社会に効果的に参加することを可能とするとの目的の下、幼児教育においては自立と社会参加を見据えて、その時点で教育的ニーズに最も的確に応える指導を提供できる、多様で柔軟な仕組みを整備することが重要であるとしている。

保育所においてはインクルーシブ教育の観点から今後、さらに保育者は、子ども一人一人の特性を受け入れながら生活や遊びを共にする機会を可能な限り作り、あらゆることに参加することがあたり前とする意識をもち保育していくことが重要である。

そこで、障害を持つ子が集団の中で安定して自己を十分に発揮できるよう、看護師、栄養士、嘱託医、専門機関等の関係機関との連携や具体的な見通しをもった個別指導計画と支援計画の立案について等、保育者が今後、統合保育を進めていくうえで重要なことや課題を保育現場での保育実践記録から考察した。

2. ケース 1

A児➡ 精神発達地帯に伴う言語発達地帯（自

閉的傾向) 関係機関 (A 病院発達外来)

・入所時年齢 (4 歳) ・性別 (男) ・入所年数 (2 年保育) ・クラス形態 (3, 4, 5 歳の縦割クラス) ・保育形態 (統合保育)

【入所当初の姿】

- ・偏食が目立ち好きなものと主食にスープを付けて食べる以外は食べない。しばらくは座っているが目を離なすと立ち歩く。
- ・紙パンツを使用。排泄しても知らせない。トイレを嫌がる。
- ・着替えをさせようとするとう怒って反り返り泣く。

- ・呼びかけても振り向かない。意味不明の発語はある。
- ・高い所が好きで登って飛び降りる。
- ・水道での水遊びが大好きでビショビショになって遊ぶ。
- ・動物小屋のウサギ、ニワトリに興味を示す。
- ・保育者が傍で歌ったりすると、怒って叩く。
- ・やりたいことを止められると急にのけ反り、奇声をあげて叩く、噛みつこうとする。
- ・皆が集まっているところは好まず、連れていこうとするとパニックになる。

〈子どもの姿と保育者の関わり〉

	友達との関わりの中から	大人との関わりの中から
1 期	<ul style="list-style-type: none"> ・本児が奇声をあげるとびっくりして見ている子がいた。 ・「何でしゃべらないの?」と聞いてきた。「まだしゃべれないけど、だんだん話せるようになるよ」というと「そうか」と納得した。 ・A 児が弁当の片づけができたとき、拍手をする保育士を見て、一緒に拍手をする子ども達の姿がみられた。 ・3 歳未満児クラスで落ち着いて遊ぶ。 <p>※本児が居心地よい場所で過ごせるよう全クラスで受け入れていった。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・スキンシップを大切にしながら、信頼関係作りに心掛けると、抱っこやおんぶを求めてくるようになった。 ・生活面は毎日繰り返し積み重ねながら進めていき、少しでも出来たら拍手をし、大いに誉めていくと、嬉しそうな表情を見せ、少しずつやろうとする姿がみられ始めた。「A ちゃんお弁当箱しまえたよ」少しでも出来たときにはその都度子どもたちに伝えていった。 ・できるようになったことやその過程を母親に伝えると、「誉めることの大切さを忘れていました」と日々を振り返る姿がみられた。 <p>それからは家庭でも誉めたり、食事の準備や片づけなど、できそうなことはやってみるようになってきたと伝えてきた。</p>
年中児 2 期	<ul style="list-style-type: none"> ・子ども達が「A ちゃんかわいい」と言うようになった。 ・年長児の M 君が本児の着替えを手伝ったり、外に出てしまったときに連れ戻したりしている。本児も機嫌のよいときはやってもらっていた。 ・0 歳児クラスが落ち着くようで、赤ちゃんの傍では嫌がらずに遊んでいた。0・1 歳児が遊んでいる姿を見てパズルボックスなどの使い方に興味を示し遊んだ。 ・プールなど、友だちが沢山いるところでも少しずつ嫌がらずに遊ぶようになった。 	<ul style="list-style-type: none"> ・じょうろや水鉄砲などを使っての水遊びは好んだが、プールに入るのは抵抗があったので少しずつ一緒に入りながら進めていくとプール遊びも楽しめるようになった。 ・指さしが見られるようになったので、「○○だね。○○だよ。」と固有名詞を繰り返し教えていると、ある日突然、保育士が指さして「トンボだ!」という「トンボ」とオウム返しで言った。(初めて発した言葉) ・着脱も誉めながら進めることで、ズボンを下に置くと一人で履くようになった。また少しずつではあるが言葉がけで行動できるようになってきた。

気になる子への配慮を含めた指導計画

3期	<p>・友だちが「Aちゃん遊ぼう」と誘い、触れたり一緒に走ったり積極的にA児に関わろうとした。A児は嬉しそうな表情も見られたが、無理に抱きつかれたり、キスされたり、連れて行かれると、奇声を発して嫌がった。そんな時は保育士が仲立ちとなり、相手の気持ちになって考える機会をその都度作っていくようにした。</p> <p>・少しずつ周りの友だちのやることに興味がでてきて友だちの遊びを真似て一緒にやろうとする姿が見られるようになった。(バットでボールを叩く、ペンキ塗りの時筆にペンキをつけてから塗る等)運動会のあとは「よいい、どん」というと走る姿も見られた。</p>	<p>・専門機関と一緒に同行しアドバイスを受けたことを保育に意図的に取り入れていくことで、「ちょうだい」のしぐさをしたり、たまに言ったりするようになった。また、呼ぶと振り向くようになった。</p> <p>・パジャマ袋に表示してあるクラスマークの絵を見て、保育士を真似てクラス名を言えるようになった。</p> <p>・父親と出かけた際、おんぶしてみても大変だったようで、保育士がいつもおんぶしてくれていることへの感謝の気持ちを保護者が伝えてきた。また子育てに対する父親の協力体制が保育所に来てさらに良くなったと母親から話があった。</p>
4期	<p>・保育士と一緒にいれば、短時間ではあるが友だちの中に一緒にいられるようになってきた。</p> <p>・些細なことでもできた時は大いに誉め喜ぶ保育士の姿を見て、子どもたちも一緒になって拍手しながら喜んでいたが、担任が傍に居ないときでも、子ども達が本児の行動に気づき、拍手する姿がみられるようになった。</p>	<p>・「〇〇せんせ」と担任の名前を初めて言った。拍手し抱きしめながら喜んだ。迎えの際に母親にこのことを伝え、「ママだよ。ママ、ママ」と指さし教えると「ママ」と言えた。感激のあまり母親は涙し担任と手を取りあって喜んだ。</p> <p>・その後、固有名詞が少しずつ出てきた。</p>
年長児 3期	<p>・園庭で他児がマスゲームをしているのを見て、離れたところで真似ている姿がみられた。</p> <p>・専門機関のアドバイスを心掛け、環境づくりをしながら機嫌のよい状態を観察し、タイミングをみて、かけっこやマスゲームで使う旗振りに誘った。旗振りには興味をもっていた。集団には入らないが少し離れたところで喜んで旗振りを真似ていた。</p> <p>・A児が上手く旗振りをしているのを見て、子ども達も拍手で応援していた。</p> <p>・このころになると子どもたちも、本児の機嫌の良し悪しや、表情の乏しい微妙な変化も感じられるようになり、「先生、Aちゃんが喜んでよ」と伝えてくれるようになった。(普段表情があまりないが機嫌のよい状態のときは柔らかい表情で口角がやや上がっている。)</p> <p>・運動会では、かけっこに誘いかけると、保育士と一緒にかけることができたので大いに誉めた。その後、機嫌の良い状態のまま次のマスゲームにも参加した。(保育士は本児の後ろで見守る)旗振りや移動も他児の遊ぶ様子を毎日見ている中で覚えていて一緒にできた。</p>	<p>・運動会と一緒に参加させてあげたいとの思いで専門機関に相談し、アドバイスを受けた。 ➡[そこに入れるまでのモードを整えて誘いかけてみる。]</p> <p>・大いに誉めることで表情が柔らかく機嫌もよくなることもあるので、そのタイミングをつかみ促していく。</p> <p>・保護者とは事前に運動会の参加の仕方を話し合った。</p> <p>大きな集団の中でパニックにならないよう、機嫌の良い状態を整え、様子を見ながら無理なく参加していく。時にはおんぶすることもあることを伝えた。</p> <p>・本児の運動会での姿を見て父母ともに感激で涙していた。保育士も本児の成長を共に喜び合った。</p>
年長児 4期	<p>・修了式への参加の仕方を子ども達と話し合った。保育士➡「式場に入場するときAちゃんは一人で入れないのでどうしたらいいかなー」子ども➡「皆がお父さんやお母さんと手をつないで入ればいいよ」保育士➡「それはいい考えだね。そうしましょう」その年の修了式は子ども達が保護者と手をつないで入場し、保護者は子ども席の後ろに座る形で式を行うことになった。</p>	<p>・修了式はお父さんと手をつないで入場でき、修了証書授与では「大きくなったら人の役に立てる人になります!」とお父さんが本児の代弁をした。感動的な修了式だった。</p>

〈保育実践の結果〉

(1) 子ども同士の関わりの中で

○子どもにとって

- ・ A 児の周りには言葉を含めたいろいろな刺激が溢れているので、その刺激が自然な形で影響を与えていた。
- ・ 周りの子ども達にとって A 児がいてくれることで、世の中にはいろいろな人がいることを自然な形で理解できる。またその子たちと関わる中で、いたわる心や優しさなど、様々なことを学んでいた。

○保護者にとって

- ・ 周りの友だちとの関わりの様子を知らせると、とても喜び少しでもいろいろな刺激を受けて欲しいと願っていた。

○保育士にとって

- ・ 子ども集団の中では自然な形で子どもを受け入れており、その姿を見て、はっとさせられ学びを得ることが多かった。
- ・ その一方で、障害児が嫌がることに対する関わり方については、意識して知らせていくようにした。

(2) 保護者との関わりの中で

○子どもにとって

- ・ 家庭でも保育所でも誉めてもらうことで出ることが少しずつではあるが増えてきた。また、自分から抱っこやおんぶを求めてくる姿も増えた。

○保護者にとって

- ・ 保育所に子どもを預けるようになって、保育所での職員の関わりが家庭での育児にも良い影響を与えているようであった。また、心身

ともにゆとりができたようで、笑顔が多く見られるようになった。

○保育士にとって

- ・ 保育所で行っていることが家庭にも良い影響となったことに喜びを感じた。それとともに改めて自分たちの保育が家庭に与える影響の大きさや、それが子どもの育ちにも繋がっていくことを思い、保育者としての責任を感じ、身の引き締まる思いだった。
- ・ 保育所が保護者にゆとりをもたらし、心のよりどころとなっていることを頭におき、そのためには安心して子どもを託せるように日々の保育の充実を図るとともに、保護者の話に耳を傾け共感する、子どもの様子を細目に知らせるなど、保護者とのコミュニケーションの大切さを痛感した。

(3) 専門機関との連携の中で

○子どもにとって

- ・ 本児の状態や発達に見合ったアドバイスにより確実な成長、発達がみられた。また、興味の範囲も広がっていった。

○保護者にとって

- ・ 「だいじょうぶですよ」「まだまだのびますよ」の言葉がとても心強く、日々の中で取り入れられる具体的なアドバイスをもらえることで目標ができ頑張ることができていた。
- ・ 取り入れていく活動の選択は大人がしんどいことは無理にしくなくてもよい、大人が休む時間も大切だということを伝えてもらい肩の力が少し抜けたようであった。保護者の心のケアも大切にしていることを感じた。

○保育士にとって

- ・これでいいのだろうか？どうしたらよいのだろうか？と思い悩んでいたことが、専門機関の先生から、子どもの状態に対する関わり方のアドバイスを受けたことで安心して保育にあたれるようになった。
- ・専門知識を学ぶことができるとともに、関わり方の具体的な手立てを教えてもらうことができ、指導計画のなかに取り入れその子に適した育ちの援助ができるようになった。
- ・専門機関のアドバイスを家庭とともに受けとめ、同じ目標をもつことで、発達の過程を同じ視点で追うことができ成長を共に喜びあえるようになった。

〈指導計画〉

指導計画は、その子のきめ細かな発達の援助と障害のある子とない子が生活を共にする中で育ち合い、成長に繋げていけるように、個別の指導計画とクラスの指導計画を作成した。

(1) 個別指導計画

個別指導計画は、子どもの行動を十分に観察ながら発達の程度を把握し、『年間指導目標及び手立て』を掲げ、期毎に発達の変化(食事、排泄、着脱、上肢、下肢、言語表現、言語理解、遊び、自律、対人関係)を記録し、[子どもの姿][課題と保育者の働きかけ][反省と課題]を掲げ、目標達成に向けていった。

(2) クラス指導計画(3・4・5歳縦割クラス)

クラスの目標及び各年齢の目標、子どもの活動、環境構成、保育者の配慮、気になる子への配慮や手立てを含め作成した。

〈省 察〉

これは障害をもつ子どもの担任保育士と、A児、クラス子ども達、保護者、専門機関との関わりの事例である。

A児は言語障害を伴う自閉的傾向があり、こだわりが強く、入所当初は集団を好まず、ほとんどクラスに落ち着いて居ることはなかった。その為、A児ができる限り居心地の良い場所で過ごせるよう保育所全体で連携し、担任のサポート体制をとり、受け入れ、見守りをした。

担任保育士は、日々の一つ一つの言葉がけや、やり取りを丁寧に我慢強く繰り返しかかわり、少しでも出来たときには大いに誉め喜んだ。その姿を日々見ていた子ども達が、本児の成長を見ると、保育士と一緒にあって喜んだり、本児の微妙な感情の表現まで察知し、同じ仲間として自然な形で受け入れ生活していった。

当初は他児と関わることに強い抵抗を示していた本児も、機嫌の良いときは少しずつではあるが一緒に過ごせるようになり、年長児の運動会では傍で保育士に見守られながら、旗を使ったマスゲームにも参加できた。

A児の2年間の姿を振り返り、保育士の子どもの心持を察知し、重んじ、愛情と熱意を持った子ども達との日々の関わりが、障害を持つ子どもと健常児が触れ合い、相互関係の中で育ちあう統合保育の利点を引き出せたのではないだろうか。また、保護者との信頼関係を深める努力により、家庭と協力しながら育ちを支えていけたこと、専門機関の的確なアドバイスが保育者や保護者を支えてくれた

こと、そして保育所全体の連携など、様々な環境が本児の成長に繋がっていったことを思い、改めて連携の重要性と保育者の姿が、子ども達や保護者に及ぼす影響力の大きさを思った。

〈考 察〉

【指導計画立案にあたって】

- ・子どもの発達過程や心身の状態を十分に把握し理解することが大切であり、その実態を的確に把握したうえで長期的、短期的指導計画を立て保育にあたるが必要になってくる。また、子どもを理解するうえでは其々の障害に対して十分な知識が必要であり、専門機関と連携し必要に応じて助言を得ることが重要である。
- ・指導計画はクラスの指導計画と個別の指導計画をどう関連させていくか、環境構成や援助など具体的に見通すことが必要であり、それには障害のある子と友だちとの関わりを丁寧に観察し把握していくことが求められる。

【職員相互、専門機関との連携】

- ・子どもが安定し、自己を十分に発揮しながら生活できる環境を整えるうえで、担当保育士をはじめ、他のクラス担当者、看護師、栄養士、嘱託医、専門機関などが連携していくことが必要であり、そのためには保育所内では定期的に話し合いをもつこと、関係機関においては必要に応じて状況を伝え助言を得ながら保育していくことが重要である。

【家庭との連携】

- ・子どもを理解し援助するうえで保護者との連携は何よりも大切であり、子どもの姿を伝え

あいながら家庭と保育所が同じ姿勢で関わっていくことでその子の発達をより効果的に引き出すことができる。それには保護者との信頼関係が極めて重要で、それを深めていくには子どもの成長を見逃さず些細なことでも保護者に伝え、保護者の悩みや不安など心持を理解し支えていくことが大切である。

気になる子への配慮を含めた指導計画

3. ケース2

B児➡多動傾向あり、一瞬気が向いてもすぐ

に走り出す。関係機関（言葉の相談に通う）

・入所時年齢（2歳）・性別（男）・入所年数（4
年保育）保育形態（年齢別保育）

【入所当所の姿】

・発語は単語レベル（ママ、パパ、ワンワン）

・要求は動作で示す。母の手クレーン動作。

・買い物はカートに乗せないとどこかに行つて
しまうほど。

・落ち着きなし室内を走り回る。

・高いところに登りたがる。

〈子どもの姿と保育者の関わり〉

年齢	子どもの姿	保育者の関わり	関係機関との連携
2歳児	<p>高いところに上る、走り回るが自分で危険行動を理解することが難しい。</p> <p>・水が好き、視線が合わずにコミュニケーションがとりづらい。</p> <p>・1対1で関わり、園庭で過ごし満足してから入室する。</p> <p>・戸外遊びをしないとパニックになる。（ひっかく、叩く、泣く）</p> <p>・着席がみられる（好きな絵本、手遊びに関心がでる）</p> <p>・食事は周囲の雑音に左右され座ってられない。</p> <p>・着脱、手洗い、排泄は1対1の関わり。</p> <p>・保育士をひっかく叩く行動が減る。</p> <p>・自分から保育士に抱っこを求めたり泣いて訴えたり自分の気持ちを人に伝えるようになる。</p> <p>①他児や保育士を叩く。</p> <p>②ままごとや棚や机の物を払い落とす。</p> <p>③部屋から出ていく行動が目立つ。</p> <p>・目が合うようになる。大人の表情を確認する。</p> <p>・担任以外の保育士や他児に自ら寄ってきて声を発し、笑顔がみられる。</p> <p>・他児の姿が気になり行動をまね、同じ空間に居られる。</p>	<p>・N君の好きな遊びを知り、それを介して関わりを積み重ねる。</p> <p>・危険を理解することが難しいのでわかりやすい言葉で声をかけ手を添える。他の提案をするなどなるべく行動を知らせていく。泣く・怒る等の、行動につながらないように抱っこや好きな遊びに誘い気持ちの安定に切り替える。</p> <p>制限や阻止の前に止める。</p> <p>・視覚的な工夫で入室できるように働き掛ける。</p> <p>・“ダメ”ではなく、“いたい・だいじ”と言葉を選び、声をかける。</p> <p>・本児の視界に入る所で一緒に笑い楽しさを共有していく。</p> <p>・集まったり、行動したり正しい行動をしている他児をしっかりほめる。（モデルになってもらう）</p> <p>・保育士と一緒に着席して隣で食べる。</p> <p>・“ちょうだい”“どうぞ”と本児の手と手を重ねて一緒に丁寧に関わりを積み重ねる。</p> <p>・抱っこや好きな遊びに誘い気持ちを切り替える。</p> <p>①は、自分の思いが受け入れられない苛立ちと考え何を訴えているのかを理解し受けとめ落ち着くまで寄り添う。</p> <p>②と③は、保育士の気を引きたい行動と考え、関わる保育士を固定して安定を図る。</p> <p>・クラスで行っていることに興味を持ってもらえるように他児とたくさん遊び楽しい雰囲気を作る。</p> <p>・“はじめと終わり”をはっきり知らせることで他児と一緒に順番を待つことの理解につなげる。</p>	<p>言葉が遅いので注意してみてほしい。（母）</p> <p>・市の言葉の相談に通う。</p> <p>保護者へ</p> <p>・成長の姿やかわいらしい面を伝えていく。</p> <p>・子育ての大変さを受けとめ一緒に考え関係を作る。</p> <p>・迎え時保育士が荷物をまとめ、母が本児に付いて動けるようにする。</p> <p>母（面接にて）</p> <p>・叱っても育たないことを知り、どうしていけないかを伝えるようにしているという。</p>

<p>3 歳 児</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・いつもと違うものが棚にあると落ち着かず取る・壊す。 自発の言葉が増えるが「ヤダ、ダメ」否定語が多い。 ・他児の泣き声が気になり「バカ」と言い蹴ることがある。 ・ロッカーに入ったりジャンパーに包まったりして自分の居場所を求めている。 ・運動会、いつもと違う場所に雰囲気戸惑って痙攣を起し不安をぶつけている。 ・「ちょっと待って」の言葉を使い自分で切り替えられるようになる。自分の思いを伝えられる。 ・追いかけてこに友達を誘う。 ・「○○ちゃんがしちゃったよ」「行っちゃったよ!」と他の子どもたちも気にかけている。一緒に手を繋ぎ待つようになる。 ・友達の名前を呼ぶ。 ・言葉のバリエーションが増える。「おさかな、かわいいね」 ・クラス活動になると他のクラスが気になり落ち着かない(逃げる)。 食事を他児と同じタイミングで食べる事を嫌がる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・同じ環境を心掛け、活動に応じて触れてほしくない玩具などには布をかけるなどして見てわかる環境を作る。 ・「いやだったね!」「やりたかったね!」と気持ちを代弁し、言葉の裏側の気持ち寄り添って関わる。 ・大きな音、大きな声、小さな子が騒ぐ声に反応する様子を察知し移動し安定するのを待つ。 ・予想される行動への対応策を保育士間で話し合い寄り添うことで競技に参加できた。 ・保育者の対応により落ち着かない。 ・1対1で追わなくても危険な行動が少なくなるが、声掛けでの静止や理解が難しいため気になる行動が出た時にすぐ対応できるように傍で遊ぶ。 ・いつも寄り添う姿に他児から「ずるい!」という感情が寄せられた。他児との関係が育ちつつあることを考慮し担任だけでなく関わる保育士を検討。 ・廊下、他のクラス、事務室、ホール等本児が逃げる場所を求めているときは受け入れて落ち着いたところに担当保育士が迎えに来る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・言葉の教室に通う。 ・職員で共通理解。 ・職員会議で話し合い関わる幅を広げる。 3歳半健診より母子通園施設を勧められ通う。
<p>4 歳 児</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・進級した当所前のクラスに戻りたがる。 ・新しい担任に対し「あっちに行つてよ」と拒否。 ・友達に関心を示し攻撃的な姿が多い。 ・水道の蛇口をひねり、水を出して遊ぶ。制止すると、おおきな声をだす、怒って泣きわめく姿あり。 ・他児に「今使っているよ!」と言われると相手をたたいてしまう。 ・運動会、待つ・チームの理解難しい。かけっこ喜んで走るがコーナー内を走り負けると怒る。 ・みんなの中にいようとする気持ちが強くなった。 ・他児と関わりを持ちたいが、思い通りにならないと怒る・手が出る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他児に関心はあるがやり取りが理解できずに行動にでるので未然に防げるように傍にいて見守る。 ・他児と関わりたいという本児の気持ちを代弁して関係を仲介する。 ・「かして!」の言葉を使い他児に関わろうとするが相手の気持ちまでは理解できずに混乱する。貸してもらえない気持ちにも寄り添い気持ちの切り替えを図る。 ・一緒に活動することを優先しチーム名にこだわらず、違うチームに参加すること、好きな時に好きな場所で楽しめるように体制を整える。静止することを少なくする関わりでクラスの輪の中にいることが心地よい体験を重ねる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・担任が保護者の了解得て母子通園施設を訪問。 ・着席出来ない。 ・走り回る。 ・出窓に上る。 ・奇声を上げる。 (保育園生活が落ち着いていると感じる)

気になる子への配慮を含めた指導計画

	<p>・他児が譲ってくれる場面が増えたので待つことが少なくなっている。</p> <p>・制作の活動では着席ができない、「出来ない！」と怒る姿。個別にかかわると完成する。</p> <p>・友達と遊びたい、でも思うようにならないと攻撃してしまう。</p>	<p>・他児から譲る・仲間に入れる行動には「ありがとう」と言葉を使い、気持ちを伝えるとともに他児の気持ちを育てる関わりをする。</p> <p>・「できない！」と怒るが、やりたい気持ちがうかがえる、個別に関わりと完成するので積み重ねを大切にする。</p>	
5歳児	<p>・友達と関わりたい気持ちが大きくなる。</p> <p>・思い通りにならないと怒って叩く首を絞める行動がある。</p> <p>・クラス活動では“できない”という気持ちができてきている。</p> <p>・お化け屋敷（5歳児の活動）制作には全く興味を示さないがクラスの中に居る。暗いところを嫌がる本児だが、関心がないわけではない。保育士と一緒にミイラになりきり楽しむ。</p> <p>・思い通りにいかないと物を投げて部屋を出る。しばらくすると“ごめんなさい”と戻ってくる。</p> <p>・短いセリフだがオペレッタに参加、自分の出番も理解していた。保護者の顔が見えるとニコニコ笑顔。テンションが上がりわざと大きな声をだす場面もあった。</p> <p>・合奏は他の楽器が気になって落ち着かない。</p> <p>・落ち着き着席が長くなってきた。褒められると嬉しそうに頑張ろうとする。</p> <p>怒って部屋を出る回数も少なくなる。</p> <p>・自分から制作に関わろうとしている。</p> <p>・（お店屋さんごっこ）単独だが、売り手、買い手の役割分担も理解し言葉のやりとりを楽しむ。</p> <p>（卒園式）練習に参加、“おおきくなったら”のセリフを大きな声で伝えることができた。</p>	<p>・クラス活動は、内容を工夫し別の課題を準備し劣等感を持たないようにする。</p> <p>達成感の積み重ねを大切にする。</p> <p>・一日の中で（これは頑張る）というものを見つけていく。</p> <p>・保育者と一緒に他児と共有することで関心を誘う。ミイラを制作し関心を持てるように関わる。</p> <p>・思い通りに行かずに部屋を出ていくときは追わずに“〇〇したら戻ってきてね！”と声をかけ見守る。</p> <p>・合奏は立ち位置をシールで示し視覚で知らせることで安心させた。やりたいと要望した楽器は他児と一緒に体験できる機会を多く重ねた。</p> <p>・制作等“部屋の中に居る事！”と約束すると留まることができる。</p> <p>・保育士と一緒に作り、お店屋さんごっこという活動を他児と共有できるようにする。</p>	<p>巡回相談 《臨床心理士》 首を絞める行動はしっかり止める。やっではいけない行動として知らせていく。</p> <p>《学校心理士》 かっ！となったときに別の方法を教える。例：縫いぐるみをぎゅーと掴む等 着席苦手、自分の席以外に座れる場所を作る。</p> <p>母子通園施設より見学。</p> <p>・トラブルを事前に防ぎ“やってしまった！”という結果を作らないと良い。</p> <p>就学普通学級を希望する。 教育センターに相談に行った。</p>

〈保育実践の結果〉

担任間の共通理解、情報共有の方法

※職員間で共通理解と情報の共有が、求められる。

2 歳児

保育を共有するためにどのような関わりをすることがよいのかを担当同士で理解しあった。その子の行動についてはその都度話し合い①保育者が困っているのか②その子が生活しにくいのか③友達が困っているのか⇒その子が生活しやすくなったと思われる（気になる行動がめだたなくなった）※その子の行動の裏にある「内面」の言葉では表せない思いに寄り添うことができた。（例）友だちを叩く、高いところに上る。「だめ！」という言葉ではなく、言葉と行為をイメージできるような言葉を使って説明する。

3 歳児

他児の姿が気になり行動を真似するようになる。発語としては「ヤダ」「ダメ」などの否定語が多い。2 歳児の発達の特徴である「自己主張」によりヤダ、ダメ、の発語が多いと考えられる。保育者の関わりとして子どもの気持ちを受けとめるとともに、行為の意味を理解し子どもの安定できる場所や物（環境）を用意していくことが求められる。「自我の育ち」を積極的に受け止めることにより自信が持てるようになる。本児をクラスの仲間の一人として受けとめていかれるように他児の気持ちも大切にするように職員間で子どもとの関わり方を共通理解し、周囲の子どもたちの気持ち

ちにも寄り添った。

4 歳児

他児と関わりたい、遊びたいという気持ちがあり、他の子どもたちとの関係も育ちつつある。また、ルールの理解は難しく、自分の感情のコントロールする力が未発達であるので保育者は本児の「楽しい！」という気持ちを尊重し本児の求める「ごっこ遊び」を多く取り入れ、他児を巻き込んだ経験を重ねることで社会性を育てようと計画した。他児は本児との関わりから4歳の発達の特徴である葛藤を経験している。本児の気持ちに寄り添うとともに他児の気持ちも受け入れ、周りの大人に共感してもらったり、励まされたりすることを繰り返しながら友達や身近な人の気持ちを理解することができている。

5 歳児

集団活動（お店屋さんごっこ・お化け屋敷）へのイメージを持つことができ、クラス活動に参加できてきた。友達と共有は難しいが、他児と同じ空間で活動を経験することができていた。保育者は、同年齢の子どもたちと同じ活動が楽しめるように、環境を工夫することで他児と同じ空間に居られるように配慮した。

〈省 察〉

児に対する保護者の思いに寄り添い、保護者の“言葉が出ないだけ”という思いに隠れている不安や“〇〇だけはできる！”と肯定する言葉を受け入れ尊重しながら、保育園生

活の様子を伝えた。良い行動を多く伝え「子育ての意欲」を支援するような意識を常に持ち、気になる衝動的な行動には専門機関や巡回指導に相談することを伝え「保護者と共に」本児の成長に関わることができた。

積極的に療育に関わってもらうことが本児の為と保育者側は考えてしまうところだが、母親の思いを本当に受け止めて支援していたことになるだろうか、「子育てが楽になる支援」も本来求められていることなのではないかと葛藤もしていた。しかし、保護者の生活形態の変化により現実には療育から遠のき、繁忙期の延長保育利用が増え、環境は一変したが、職員間で個別の関わり（巡回指導での・過ごし方・職員配置・情緒の安定）を周知考慮することで、保護者も周囲の子どもたちも安定した生活環境を保つことができた。

児に対する保育者の思いは、気になる衝動的な行動には何らかの理由があるはず。「気になる行動は児が困っている行動！」と捉え本児の理解に努めた。子どもの成長は一人ひとり違う、生活や遊びの要求・活動への関心や参加の仕方・友達との関わりを丁寧に把握して環境や援助の内容を具体的に見通すことが大切になり、個別の関わりによって、確実に成長していることを実感し保護者と共有することができた。

児に対する他児の思いは、お互いの成長と共に「無関心な並行的な存在」➡「互いの存在に気づき」が、保育者の仲介により同じ空間を共有するようになった。児の成長する様子を保育者の言葉や行動で気づき、クラスの一員として達成する感動を味えたことは、生

活を共にしてきた他児にとっても、いつの間にか身についた「他児を受けてれる」という大切なことが育っていたのではないかと思う。

まとめ

現在、幼稚園、保育所では発達の気になる子どもの入所が増加していると言われている。保育所保育指針第4章保育の計画及び評価では、「保育所は、第1章総則に示されている保育の目標を達成するために、保育課程を編成するとともに、これを具体化した指導計画を作成しなければならない」とされ、「すべての子どもが、入所している間、安定した生活を送り、充実した活動ができるよう柔軟で発展的なものとし、一貫性のあるものとなるように配慮することが重要である」と示されている。

第6章保護者に対する支援2.保育所に入所している子どもの保護者に対する支援では、「(4) 子どもに障害や発達上の課題が見られる場合には、市町村や関係機関と連携及び協力を図りつつ、保護者に対する個別支援を行うよう努めること」とあるように、障害や発達上の課題が見られる子どもやその保護者に対して、さらに十分な配慮のもとに保育並びに支援を行うことが必要になっている。保護者に対しては必要に応じて保育指導を行うとともに、他の子どもや保護者に対して、障害に対する正しい知識や認識ができるよう支援する必要がある。子どもの保育に当たっては、第4章1(3)ウ「障害のある子どもの保育」に記されている事項に十分配慮し、保護者、主治医や関係機関との連携を密にするととも

に、必要に応じて療育機関など専門的機関から助言を受けるなど、適切にな対応を図る必要があるとある。

2つのケースから、子ども同士の関わりを見ると、クラスの仲間の一員としてお互いを認め、生活することから刺激し合い影響を受けながら成長している。子どもは保育者の言動をよく観察しており、保育者がいない時でも障害児に対して上手に関わりを持ち、援助することができる。子ども一人一人はみんな違う。誰一人同じではない。成長、発達の過程はほぼ同じであるが、成長の速度はそれぞれ違う。子どもの成長、発達を援助することは、子ども一人一人を理解し、子どもが主体的に生活できるように環境を用意することである。

保育所保育指針にも「保育所は人、物、場等の環境が相互に関連し合い、子どもの生活が豊かになるよう、計画的に環境を構成し、保育をしなければならない」とある。子どもの成長、発達に合わせ一人一人の違いを把握し、見通しを持った指導計画を作成することで、その子どもにあわせた援助ができる。障害をもった子どもも、個別に持っている力を十分に発揮し、そして引き伸ばしていけるように援助していくためには、指導計画作成は必須である。

指導計画は、個別と集団（クラス）の育ちができるように、子どもの姿を的確に把握し、子どもの育ちに必要な経験ができるようにしていくことが保育者には求められる。子どもが主体的に活動し、充実感、満足感を得ることで自分の存在を認め、他人を受け入れることができ、仲間と気持ちを理解し合うことが

できる。そして社会の一員として生活するための基礎ができてくると考える。

子どもは、自分の仲間が障害の有る、無しに関係なく一緒に遊び、生活している。保育者がインクルーシブ教育の意義を捉え、特別な子どもとしてではなく、一人一人の特徴と捉え、発達に合わせた関わりや援助をしていくことで、子どもは仲間と共に育ち、その子らしい育ちをしていくことができる。

今後も、発達の気になる子どもや特別に配慮を必要とする子どもも含め「子どもの最善の利益」を守れるように、子どもや保護者に対する支援を関係機関や地域と連携しながら進めていくことが、保育所に求められる役割だと考える。

〈参考文献〉

- ・ 保育所保育指針解説書 フレーベル館
- ・ A 市障害児保育の手引書